



読書空間 『ザ・ペニンシュラ・クエスチョン 朝鮮
半島第二次核危機』 船橋洋一

木村, 幹

(Citation)

論座, 141:306-307

(Issue Date)

2007-02

(Resource Type)

article

(Version)

Accepted Manuscript

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001591>



『ザ・ペニンシュラ・クエスチョン 朝鮮半島第二次核危機』 船橋洋一

本書は、日本を代表するジャーナリスト、船橋洋一の、渾身の一作である。取材の対象は文中に明らかにされているだけでも、6 者協議当事者の日米中露韓を含む 6 カ国の 158 人に及んでおり、そこには、小泉・安倍両総理や、韓国の金大中前大統領など、各国の要人や現場の外交官の名前がずらりと並んでいる。現在進行形の問題に、これほどまで広範な取材を行い、詳細にまで深く踏み込める力量には、まずは脱帽する他はない。正に「圧倒的な著作」というべき作品である。

そのような本書には既に多くの好意的な書評がなされている。しかし、評判のよい著作の書評を今更改めてべたほめしても面白くない。そこでここは、評者の責として、少し辛口の書評に徹することとしたい。

尤も、それは何も評者が無理に本書を腐そうとしていることではない。何故なら、評者は実際、「圧倒的な著作」である本書が同時に明確な限界を持っており、それ故、一部の読者に今日の北朝鮮を巡る状況について誤解を与える可能性があるのではないか、と思っているからである。そのことは、例えば、日朝交渉における日本の動きや、米朝交渉でのアメリカの思惑が微細に書かれているのに対し、韓国の描写はかなり単純なものとなっている、ことに典型的に現れている。同じことは、日朝交渉自体を巡る記述についても言える。「ミスターX」の活躍する小泉総理の第一次訪朝が生き生きと記述されているのに対し、第二次訪朝は、明らかに厚みを欠いている。

勿論、これら記述の「^{むら}斑」の理由については、容易に想像することができる。北京特派員やアメリカ総局長を歴任した筆者は、日米関係や中国について程には、韓国には「土地勘」を持たないのかもしれない。外務官僚が「表のルート」でお膳立てをした第一次訪朝とは異なり、首相官邸と朝鮮総連を結ぶ「裏のルート」で準備された第二次訪朝には、敏腕の著者でも、或いは十分に記述できない部分があったのかも知れない。

しかしそれらよりも重要なことが一つある。それは、本書には、外交交渉とは各国を代表してその場に集う、こざっぱりとした「外交のプロ」達により冷静で合理的な判断に基づいて進められるべきものである、という暗黙で、エリート主義的な前提が存在しているように見えることである。本書の各所において、言わば「主役」の役割を果たすのは、例えば、田中均や藪中三十二、ケリーといった、豊富な外交交渉の経験を持つ人々である。このような筆者のこざっぱりした「外交のプロ」への傾きは、例えば北朝鮮外交官の中においてさえ、実力者姜錫柱よりも「垢抜けた」金桂寛を好意的に描いていることにも現れている。互いに相手を知りぬいた百戦錬磨の外交の「プロ」達が、それぞれの制約を抱えながらも、重大な危機を目前に、自らの国益を実現すべく、互いを尊重しながら切磋琢磨する。その意味で本書は、一面では「外交テクノクラート版プロジェクトX」とでも言うべき空気さえ有している。

問題は、本書が筆者への主たる情報提供者でもある「外交のプロ」達と視線を等しくする一方で、彼等が背景に抱えていた筈の、そしてだからこそ同時に描き出されるべき、世論という名の巨大な存在については — 全くではないにせよ — 見落としがちである、ということである。そしてだからこそ、本書では、北朝鮮を巡る危機が未だそれほど深刻なものと看做されず、それ故「外交のプロ」達が比較的大きな行動の自由を有していた、交渉の初期については、生々と描かれるのに対し、後半の部分は魅力を欠いたものとなっている。理由は恐らく、簡単である。各国の世論は、北朝鮮を巡る危機が深刻化するに連れ、この問題に大きな関心を持つようになり、結果、各国の「外交のプロ」達は、この世論とそれに突き動かされる様々な動きに大きく縛られるようになっていったからである。小泉総理の第一次訪朝時から、第二次訪朝時に至るまでの間の、外務省の交渉イニシアティブ喪失は、正にその典型であり、韓国においても金大中政権から盧武鉉政権へと至る時期の対米・対北朝鮮感情の変化は、深刻な危機の中における韓国政府の外交方針を北朝鮮に対する宥和政策の側に固定することとなった。

つまり、北朝鮮を巡る問題のみならず、今日の現実の外交は、本書で書かれているのよりももう少し、各国の様々な世論の空気を、様々な形で重く感じながら展開されている。日本における拉致問題への強力な反発、韓国における北朝鮮に対する同情と軽蔑の入り混じった複雑な民族意識、そして、アメリカにおける北朝鮮問題に対する関心の異常な小ささ。それらが何れも、今日の北朝鮮を巡る問題に色濃く影を落としていることは言うまでもない。そして、「外交エリート達のプロジェクト X」も、飽くまでその枠内で展開されている。その意味で本書の限界は、今日の「外交のプロ」達の抱える限界と、一致している。

そしてだからこそ、最後にもう一度言おう。本書は、わが国を代表するジャーナリストが、膨大な時間と労力、そして何よりもその豊富な才能を傾けて書き上げた「圧倒的な著作」である。我々が本書に学ぶことは多く、北朝鮮問題のみならず、わが国の外交や国際問題についての根本的な問題へのヒントが随所に散りばめられている。だからこそ、思う。そこに各国の外交エリートを縛り付ける各国の「空気」が描かれなかったことが惜しい、と。